

論 文

国立大学に建学の精神はあるのか？

— 広島大学、大阪大学の場合 —

はじめに

国立大学に建学の精神や理念はあるのだろうか？私立大学の場合だと、多くは特定の創設者がおり、彼らによって、大学建学の精神・理念が語られている。そして多くの場合、この建学の精神は現在においても重視され、大学のアイデンティティとなっている。各私立大学の沿革史においても、創立の経緯や創立者の思想、すなわち建学の精神に重点をおいて記述している場合が多い¹⁾。また、社団法人日本私立大学連盟によって『建学の精神』（一九八四年）と題する書籍が刊行されていることは、私立大学にとって建学の精神がいかに大事であるかをよく示している。

一方、政府によってつくられた国立大学の場合、特定の創設者がいるわけではなく、したがって私立大学のように創設者によって建学の理念が語られることはない。国立大学で最も古い歴史を有する東京大学の場合をみてみよう。寺崎昌男は、「まず、東京大学の創立に『理念』はあったか。」という問いを發し、それに対して「結論的には、大学

菅 真 城

独自の理念はありませんでした。」と答えている。一八八七（明治一〇）年に文部省から出された東京大学の創立を宣告した布達には、「文部省直轄東京開成学校、東京医学校ヲ合併シ東京大学ト改称候事」とあるのみであり、何のためにこの大学をつくるかといったことは全く書かれていないのである²⁾。これはひとり東京大学のみならず、すべての国立大学について当てはまることであろう。

多様な前身諸学校を包括・併合して成立した新制国立大学についても、一九四九（昭和二四）年五月三十一日に公布施行された法律第一五〇号国立学校設置法において、大学の名称と位置が表示されているのみである。したがって、法律から個別国立大学の建学の精神・理念をうかがい知ることはできない。

しかし、国立大学法人化した現在、国立大学にはその中期目標でまず大学の理念を提示することが求められている。そして実際に国立大学は、建学の理念や精神といったものを明記している。これらへの大学は、法人化とともに突然理念を制定したのであろうか。なかにはそのような大学が存在するかもしれないが、歴史的経緯の中で大学の建学

の精神・理念を「発見」し、「形成」していった大学も存在する。本稿では、広島大学と大阪大学の場合について考察する。

一 広島大学の場合

1 初代学長森戸辰男の広島大学構想

新制広島大学は、広島高等師範学校、広島文理科大学、広島工業専門学校、広島高等学校、広島女子高等師範学校、広島師範学校、広島青年師範学校を包括、広島市立工業専門学校を併合し、一九四九（昭和二四）年五月三一日に設置された。一九五三年には県立広島医科大学を国立移管し、医学部を設置した。前身校は学校の種別では大学、専門学校、高等学校、師範学校と各種の高等教育機関が揃っており、設置形態も官立、公立、私立（広島女子高等師範学校の前身は私立山中高等女学校）と多様である。前身学校数は全国立大学の中で最も多い。³多様な前身校をまとめて「一つ」の大学を形成するという課題を背負って、広島大学は発足したのであった。

新制広島大学は設置されたものの、多様な前身校の存在の影響もあつて学長を決めることはできず、教育学部長（広島女子高等師範学校長）桜井役が学長事務取扱を勤めた。その後一九五〇年四月一九日になって、元文部大臣森戸辰男が初代学長に就任した。

初代学長森戸辰男は、一九五〇年一月五日に行われた開学式において、以下のような式辞を述べた。

今日の佳き日、本大学はご列席各位の祝福をえて、上來述べま

した使命と抱負をいだいて発足いたします。原爆の惨禍の後に、再び戦争の脅威にさらされている無防備日本の国民は、世界のどの国民にもまして、民主的で平和な「一つの世界」を待ち望んでおります。

だが、「平和な一つの世界」を待望するわれわれは、先ず自らの力で自らの間に民主的で平和な「一つの祖国」を建設すべきではありませんまいか。そうしてこの「一つの祖国」の精神的基礎をなすものこそ、自由で平和な「一つの大学」であります。

なぜならば、次代を負う選ばれたる青年学徒の心の中に、自由と平和な「一つの世界」が確立されたとき、その時こそ、外の世界にも平和な「一つの祖国」、平和な「一つの国際社会」の到来することを約束する手形の振り出されたときだ、と考られるからでございます。

この光栄ある開学式を機に、われわれ学園構成員は、一段の自信と勇気を加えて、自由で平和な「一つの大学」を実現し、全学の力を結集して、一路、変革期における大学の使命達成に前進する決意を新にいたすものであります。⁴

このように、初代学長森戸辰男によって、「自由で平和な『一つの大学』」という大学の目標が示され、これが建学の精神となつていたのである。⁵

翌一九五一年一月五日に行われた講演「広島大学の構想―地方的、国際的協力について―」において、森戸は、広島大学を①中国・四国地方の中心大学、②地域性のある大学、③国際性のある大学にしてい

くと構想を述べた。⁶⁾後に森戸三原則と呼ばれる広島大学の理念が提示されたのである。

一九五二年に森戸辰男は、先に引用した「変革期の大学―開学式にさいして―」「広島大学の構想―地方的、国際的協力―」に「新制大学の使命―学生運動のありかたにふれて―」を加えた三本の講演を収録した『変革期の大学』（広島大学本部、一九五二年）を刊行した。同書の「序」において森戸は、「ここに収録した三篇は、本学においてそれぞれの機会に私の述べた所感であるが、この佳き日にこれを上梓するゆえんは、広島大学の生誕と発展に好意と協力を惜しまれなかつた内外諸方にたいして衷心の感謝を表するとともに、本学の現状と構想を知っていただいて、今後一層のご教示とご鞭撻をお願いしたいからである。そして、最後にではあるが、強い情熱を込めて、独立日本の前途を祝福したいからである。」と述べている。また、同書が広島大学本部から発行されていることをあわせ考えると、森戸一人でなく事務当局も、広島大学の「建学の精神」について、大学内外に周知させたいという希望を持っていたと推測することができる。

このように広島大学において「建学の精神」たるものが存在するのは、森戸辰男というたぐいまれなる人物を初代学長に頂いたことが影響しているが、小宮山道夫が明らかにしたように、「広島大学の建学理念として知られている森戸三原則は、森戸の個性のみによって導かれた広島大学の性格規定ではなく（中略）、大学の創設経緯にその原点を有していた。三原則はいわば大学の創設経緯を忠実に再現したもので」あつたのである。⁷⁾

2 大学改革案における「建学の精神」

しかしながら、森戸辰男が一九六三（昭和三八）年に広島大学を去つてからは、「建学の精神」は、次第に人々から忘れ去られていったように思われる。

森戸は、一九七〇年一月一七日に広島市青少年センターで開催された育英友の会広島支部主催の講演会で、「広島大学再発足のころ」と題する講演を行った。その講演の末尾で森戸は、「私が今日、新制広島大学発足のころの思い出を申し述べましたのは、広島大学の、いわゆる原点ともいふべきものが、当面する二度目の大学改革に何らかのお役に立てばと思つたからであります」と述べている。⁸⁾森戸の中には、大学紛争後の広島大学改革案策定に当っては、新制大学発足時の「建学の精神」を振り返り、それを踏まえることが大切との認識が存在していた。

一九七〇年前後、「大学改革とかけて薄皮饅頭と解く、答えは餡（案）ばかり」と揶揄されたように、全国の大学で改革案が盛んに作成されたが、改革はなかなか実現しなかつた。そのような状況の中で、広島大学においては大学改革委員会等を中心に多くの改革案が作成され、その中から西条への統合移転や総合科学部の創立という改革を実現していった。

大学改革委員会は「運動としての『大学改革』」を提唱し、「仮設」「建議」の形で多くの改革案を提示した。しかし、これらの改革案はそもそも大学とはといった一般論から出発し、広島大学固有の問題については分散キャンパスを解消するための統合移転に矮小化していった。

この当時の大学改革案作成においては、森戸が指摘したような新制大学発足時の「建学の精神」を踏まえた大学改革という発想はなかったのである。

「広島大学改革への提言（仮設0）」では、「大学開放（University Extension）」の項を立て、「その具体的方法としては、たとえば、市民のための諸講座、夜間や夏期のコース、現職者の再教育（サンドイッチ方式など）などが考えられよう。」と記している。この「大学開放」についての記述は一般論であり、森戸三原則の一つである地域性のある大学やその理念に基づいて開学当初から実施された公開講座について触れるところはない。広島大学固有の歴史と理念に基づく記述とはなっていないのである。また、「当面の改革に関する建議（第一次）」には、「しかしながら、これら当面必要な改革も、単にいわゆる『対策』的発想から実施されるべきではなく、将来の広島大学のあり方についての長期的・根本的な理念と、何らかのかかわりを持つものとして考えられるべきであることは言うまでもありません。」とあるが、「長期的・根本的な理念」が何であるかという記述はない。大学紛争後の大学改革案策定においては、「建学の精神」が振り返られることはなかったのである。

3 「建学の精神」の「発見」、再評価

大学紛争を契機とする大学改革の議論において、森戸による「建学の精神」が語られることはなかった。「建学の精神」を「発見」し、再評価していったのは、大学改革案策定作業ではなく、大学史編纂活

動においてであった。広島大学では、編纂室を組織した初めての大学沿革史として、『広島大学二十五年史』全三巻を一九七七（昭和五二年）から七九年にかけて刊行した。『広島大学二十五年史 通史』（広島大学、一九七九年）には、森戸による大学整備の方針について以下のように記している。

学長に就任した森戸は、広島大学の構想を立て、その整備・発展計画を明らかにしていった。着任早々の昭和二十五年六月二二日には、皆実分校の一般教養課程の学生に対し、新制大学の使命について説き、また、同年一月五日の開学式の式辞においては、変革期の大学について述べ、「自由で平和な『一つの大学』の実現を目指す決意が示された。さらに、二六年一月五日の創立記念日に当って、広島市児童文化会館において学術講演会が開かれ、この席上において森戸学長は、かねてから描いていた広島大学の構想を明らかにした。第一は広島大学を中国・四国地方の中心大学とすること、第二は広島大学を地域性のある大学にすること、第三は広島大学を国際性のある大学とすること、以上三つの構想を掲げた。

そして、この後にこの構想について解説してある。第一節において指摘した広島大学の建学の精神・理念についてこのように記述されているのである。こうして大学史を編纂したことによって、森戸による「建学の精神」は人々の目に容易に触れることが可能になったのである。

4 理念五原則の制定

一九九五(平成三)年一〇月一七日、第四八二回評議会において、広島大学の理念が制定された。これは、教養的教育について教養的教育検討委員会で検討されている際に、教養的教育の理念・目標について検討する過程で、大学全体の理念が必要であるとの問題提起に基づくものであった。検討は、一九九五年七月から辻秀典法学部長、牟田泰三理学部長、戸田吉信学長補佐、松浦博厚学長補佐の四名でなされた。制定された理念は、以下のとおりである。⁹⁾

広島大学の理念

新たな世紀を目前にして、久しく人類を導いてきた近代の原理・原則には亀裂が生じ、いまや世界は激動のさなかにある。自由と平等の実現は困難をきわめ、科学・技術の進歩と発展は、かぎらない豊かさをもたらす反面、人間の存在そのものまでを脅かし始めている。

まもなく二一世紀である。人類は今後、おそらくその存在を賭して、世界平和、環境、人口、食糧、資源など、地球規模の難問に立ち向かわねばならないであろう。このような時代に、敢然として人類の未来を切り拓いていく英知を生み出すことは、大学に課された重大な責務である。

いま、広島大学は念願の統合移転を果たし、建学の精神である「自由で平和な一つの大学」の実現に向けてさらなる一歩を刻した。われわれは、この精神を踏まえ、学問と教育の府としての使命を果たすべく、装いも新たに出発する広島大学の理念として、

ここに以下の五原則を提示する。

- 一. 平和を希求する精神
- 二. 新たな知の創造
- 三. 豊かな人間性を培う教育
- 四. 地域社会・国際社会との共存
- 五. 絶えざる自己変革

今後、わが国の進むべき道に思いをめぐらし、近代日本、なくばなく広島百年の歴史を省みるとき、平和の希求は、広島大学のすべての構成員の思考と行動の根底に置かれるべき精神といわねばならない。この原点の上に、広島大学は、創造的学術研究と人間を中心に据えた教育を車の両輪とし、地域社会、国際社会との活発な交流を通じて相互に裨益貢献する共存関係を築くべきである。そして、つねに自己を謙虚に見つめ、絶えざる自己変革の努力を怠ってはならない。

亭々と繁るフェニックスの樹のもと、この理念が構成員によって語り継がれ、広島大学が発展し続けることを願う。

広島大学長 原田康夫

この理念五原則制定の経緯を今詳らかにすることはできないが、大学の理念を考えるに当たっては、大学の歴史を振り返ることは不可欠の作業であり、その際まず参照されたのは大学の沿革史、すなわち『広島大学二十五史』であったらうと想像される。また、この理念には前文・後文が付いているが、これについては様々な意見があった。しかし結局、原田康夫学長個人の思いということでした¹⁰⁾。ここか

ら、原田学長のこの理念にかけける思いが伺える。初代学長森戸辰男と彼による広島大学の「建学の精神」は、原田によって「再発見」されていったのである。

こうして広島大学は、建学の精神や理念について再確認していった。そのために国立大学法人化に伴い策定した中期目標の冒頭に、「『自由で平和な一つの大学』という開学以来の精神を継承し、①平和を希求する精神、②新たな知の創造、③豊かな人間性を培う教育、④地域社会・国際社会との共存、⑤絶えざる自己変革、という理念五原則の下に、国立大学としての使命を果たす。」と明記することができたのである。

二 大阪大学の場合

1 司馬遼太郎の大阪大学観と国立大学法人としての中期目標

大阪大学は、一九三一（昭和六）年五月一日に大阪帝国大学として発足した。¹¹八番目（内地六番目）の帝国大学であり、その学部は理学部、医学部の二つであった。理学部は新設の学部であったが、医学部は大阪府立大阪医科大学の国立移管によって成立した。大阪医科大学の歴史は、一八六九（明治二）年の仮病院・医学校まで遡る。一九三三年には、官立大阪工業大学が移管され、工学部が成立した。総合大学とはいえ、理科系のみの大学であり、文科系の学部が設置されるのは戦後一九四八年になってのことであった。

一九三〇年五月に柴田善三郎大阪府知事が政府に提出した上申書に

は、以下の件がある。

大阪ハ其ノ蔵スル経済力ト地ノ利ニヨリ、工業都市トシテ発展著シキモノアリ。今ヤ我国工業ノ中枢タリト雖モ、将来ニ亘リテ是レガ根抵ヲ培ヒ基礎ヲ確立スルハ、実ニ我国工業永延ノ進歩ヲ策スル所以ナリ。而シテ工業進歩ノ根抵ハ是レヲ基礎的純正理化学ノ力ニ俟タザルベカラザルニ未ダ其ノ機関ヲ有セザルハ、我大阪ノ文教上、産業上ノ一大欠陥ナリト云ハザルベカラズ。

今ヤ産業ノ合理化ヲ図ラザルベカラザルノ秋、速ニ理化学ノ蘊奥ヲ究ムベキ大学理学部ヲ設置シ以テ工業界ノ啓発革新ヲ図ルハ刻下ノ急務ナリト信ズ。¹²

このように、創設時の大阪帝国大学、特に理学部には、大阪工業界の発展のための基礎的純正理化学の研究が求められていたのであった。帝国大学とはいえ、その創設経費のみならず設立後三年間の運営費は地元が負担した。大阪帝国大学は、大阪市民と経済界に支えられ、地域社会と密接に関係して成立した大学だったのである。産学連携は今でこそ盛んにいわれるようになったが、大阪大学においては開学以来の伝統である。¹³

ところで、司馬遼太郎の小説『花神』¹⁴は、以下の文章ではじまる。

「適塾」

という、むかし大坂の北船場にあった蘭医学の私塾が、因縁からいえば国立大阪大学の前身ということになっている。宗教にとつて教祖が必要であるように、私学にとつてもすぐれた校祖があるほうがぞましいという説があるが、その点で、大阪大学は

政府がつくった大学ながら、私学だけがもちうる校祖をもつてい
るといふ、いわば奇妙な因縁をせおっている。

江戸期もおわりにちかひころ、大坂で、

「過書町の先生」

といわれた町の蘭方医緒方洪庵が、ここで言う校祖である。

司馬は、一八三八(天保九)年に開かれた蘭学塾である適塾を大阪大
学の前身、緒方洪庵を大阪大学の校祖と捉えていたのである。では、
当の大阪大学は適塾との関係をどう捉えていたのであろうか。実は、
大阪大学による自身の前身・出発点の理解は、時代によって変遷がみ
られるのであるが、これについては後述する。

なお、司馬のように、適塾を大阪大学の前身、緒方洪庵を大阪大学
の校祖とすると、適塾で学んだ福沢諭吉は大阪大学の卒業生というこ
とになり、大阪大学は慶応義塾よりも古い歴史を有することになって
しまう。なんとも「奇妙な因縁をせおつ」たものである。

話を現在の大阪大学に移そう。国立大学法人大阪大学の中期目標の
冒頭には「(前文)大学の基本的な目標」として以下の文章が掲げら
れている。

懐徳堂と適塾の学風を継承し、自由闊達で批判的な精神をもつ
て真理と合理性を追究することにより、大阪大学を知の創造の場
として世界第一流の大学とすることを目標とする。

創学以来の「研究第一主義」をモットーとし、第一線の研究成
果と実証精神をもって教育を行う。学問と研究を前にしては、優
れたものを進んで認め、分野間の障壁をなくし、教員と学生の立

場を越えて、対話と討論を重ね、より一層の高みを目指す。

得られた教育研究の成果を世界的基準によって判断し、社会に
その価値を問い、利用に供する。大学を社会に開き地域に貢献す
るとともに、自由と人権を尊重し、国際的学术交流を通じて世界
の国々に貢献する。

このようにして、教育・研究・社会貢献を通して国民と社会の
信託に応えることにより、大阪大学の「地域に生き世界に伸びる」
という理念を実現する。

驚くことに、現在の大阪大学は適塾のみならず、一七二四(享保九)
年に創立された懐徳堂をも自らと関係づけて捉えているのである。そ
してこの中期目標には、「創学以来の『研究第一主義』という「モッ
ト」と「地域に生き世界に伸びる」という理念」が明記されてい
る。

次節以下では、大阪大学が自身の出発点をどのように理解し、それ
が大学のアイデンティティとどのような関係になっていったかについ
て、「懐徳堂・適塾」、「研究第一主義」、「地域に生き世界に伸びる」
の三つを取り上げて考察する。

2 懐徳堂・適塾と大阪大学

a 適塾

適塾は蘭方医緒方洪庵が一八三八(天保九)年に大坂に開いた蘭学
塾である。「洪庵が奥医師を命じられて文久二年(一八六二)八月、
江戸へ赴き、その翌年三月には洪庵の呼び寄せで妻八重は子供らと従

者を連れて大坂北浜の家をたつた。しかし、洪庵の旧宅には塾の運営管理を任されていた洪庵の四女八千代とその婿養子拙斎が夫婦居住し、明治一九年（一八八六）ごろまで塾生の教育も行われていた。「ちなみに、これより先、明治二年（一八六九）大阪府が、大福寺（中央区上本町四丁目）に仮病院および医学校を設立した際には嗣子惟準、義弟郁藏、養子拙斎、その他門人たちがこれに参加した。したがってこの医学校・病院は、適塾を源流とする発展形態ともいべきもので、のちに幾多の変遷を経て、現在の大阪大学医学部・同附属病院となったのである。」このように、適塾と大阪大学医学部の前身である府立大阪医科大学との間には、適塾門弟が人的系譜として繋がっているであり、前節で引用した司馬遼太郎の適塾と大阪大学との関係も、この人的系譜によるものである。

適塾の建物と敷地は、一九三九（昭和一四）年に大阪府の指定史跡となり、一九四一年には文部省の史跡となった。そして、一九四二年には保存顕彰の目的で大阪帝国大学に寄付された。建物は、一九六四年に国の重要文化財に指定された。¹⁵⁾

このように大阪大学は、適塾との間に人的系譜を有しており、また、適塾の土地・建物を所有しているのである。一九七二年二月二〇日には、「大阪大学に、適塾の維持管理について協議し、かつ、適塾顕彰事業を遂行するため、適塾管理運営委員会」が置かれ¹⁶⁾現在に至るまで活動している。

b 懷徳堂

懷徳堂は、一七二四（享保九）年に学問好きの五人の町人有志が出資して創設した町人のための学校である。一八六九（明治二）年には閉鎖されたが、明治末年には西村天因（時彦）らによって復興が企てられ、懷徳堂記念会を結成、一九一六（大正五）年に新堂（重建懷徳堂）を建設した。一月一五日の懷徳堂開堂式において西村天因は「懷徳堂の由来と将来」と題して経営維持に関する四大方針を明らかにしたが、その「第三は、学派にこだわらず、先賢の遺口のように學術の門戸を広くあけて、経学以外の史学・経済学等各方面の学者を大阪に迎え入れて、大阪の欠陥である文科大学たらしめること」であった。

戦後一九四八（昭和二三）年、大阪大学に待望の文科系の学部である法文学部が設置され、翌年五月には文学部が独立した。そして二二月には、懷徳堂記念会から蔵書三万六千冊が大阪大学に寄付された。「これは武内義雄氏によつて語り伝えられているように、天因が在世当時から『懷徳堂は大阪の文科大学である。大阪に文学部が出来たときはそれに合流すべきだ』としていたもので（同氏）『懷徳堂の思い出』、『懷徳』第二八号）、この考えにそつて記念会の顧問・理事の方々の間においてずつと将来を見通して、将来大阪大学に文科大学が出来たときは、その蔵書や遺物を私せずに研究の資料として提供し、大きな立場に立つて学界に貢献しようという考えが確立していて、これが阪大に文学部が設置されるとともに実行にうつされたものである。阪大ではこの御盛意を有り難くいただき懷徳堂文庫として大切に整理・保管し、広く学界に公開して記念会の寄贈の趣旨に副うとともに、記念会

事業の運営に協力し、今後記念会と共同で事に当ることになった¹⁷⁾。

このように、懐徳堂と大阪大学との関係は、戦後の蔵書の寄贈によるものであり、適塾のように人的系譜や建物の管理があるわけではない。

なお、大阪大学文学部は、懐徳堂よりも早く一七二七(享保二)年に摂津平野郷に設立された郷学である含翠堂の蔵書の寄贈を一九四九年末に受けている。大阪大学の教員たちは、懐徳堂のみならず含翠堂についての研究も行ってきた。しかし、現在の大阪大学に含翠堂を大阪大学の源流とする歴史認識は存在しない。含翠堂の一般的な知名度が、懐徳堂よりも低いためであろうか。

3 懐徳堂・適塾の「発見」―沿革史における扱い―

a 大阪帝国大学創立史

本節では、大阪大学がいかにして自らの源流としての懐徳堂・適塾を「発見」していったかについて、大学沿革史を中心素材に検討する。

大阪大学ではこれまで、創立二五・五〇・六〇・七〇周年に創立記念行事を行っており、記念誌が発行されているが、大阪大学の沿革史で最も古いのは、西尾幾治編『大阪帝国大学創立史』(恵済園、一九三五年)¹⁸⁾である。西尾は大阪医科大学幹事として楠本長三郎学長を支えて帝国大学創設に奔走し、大阪帝国大学が設置されると初代の事務官となった。¹⁹⁾『大阪帝国大学創立史』は、西尾が自らの執務日誌をもとに執筆したもので、資料を豊富に掲載しており、資料的価値が高い。

さて、この『大阪帝国大学創立史』であるが、同書には「適塾」の文字は見られず、「懐徳堂」は大阪帝大設置を求める新聞社説の引用に下記のように一カ所出てくるのみである。

文化の発達普及のために、大都市は文科大学を持たねばならぬ、大阪は前代に於て富裕なる町人学者の余徳で文運に富んでゐた。大阪文化が関西一円を風靡し経済中心たると共に、立派な文化中心をなした。吾等は先人の余徳である懐徳堂の如き、洗心洞の如き、学問徳行の研究円練の機関を今日に残されてゐる。これを文科大学に改造することも亦一步の企業である。(五五頁)

この文章において、懐徳堂は大阪が学問的文化的風土を有していたことを論じるために登場しているのであるが、「懐徳堂の如き、洗心洞の如き」と洗心洞(大塩平八郎)と列記しているのであり、大阪帝国大学が懐徳堂の後継であると述べているわけではない。また、西尾は大学(大阪医科大学)の沿革を一八六九(明治二)年の官立医学所および病院設置に明確に求めている。大阪帝国大学創設に奔走した当事者は、大学と懐徳堂・適塾との間に何の関係も見出していなかったのである。

一九三六(昭和一一)年には創立五周年を記念して、『業績梗概…大阪帝国大学創立五周年記念』が刊行されているが、これは純粹な業績集であり、大学の歴史について述べるところはない。

戦後間もない一九四五年一〇月二五日、大阪大学評議會は文科系学部設置を求める建議書を文部大臣に提出しているが、そこには以下のように記されていた。

由来大阪は、我が国上代文化発祥の地にして、近世に於ける商都としての繁栄は、関西に於ける一大中心として、其の独特なる文化を構成したるが、西に彼の懷徳堂は、東の昌平黌に對し、堂々たる地歩を学界に占めたり。(中略) 大阪帝大内に人文科学に関する学部設置要望の声極めて大なるものあり。その実現の暁に於いては、現在地元には保管中の大原社会問題研究所蔵図書、懷徳堂文庫等膨大なる稀観資料の有効適切な活用も期待せらるるのみならず、(下略)²⁰⁾

ここでは、東の昌平黌に對して西の懷徳堂が登場している。そして、大阪帝国大学に人文科学に関する学部が設置された際には、その研究資料として懷徳堂文庫が活用可能であると述べられている。大阪大学に法文学部が設置されたのは一九四八年であるが、翌一九四九年に文学部が独立すると、財団法人懷徳堂記念会より三万六千冊に及ぶ書籍の寄贈を受けた。ここに懷徳堂と大阪大学との関係がはじまったのである。

b 大阪大学二十五年誌

『大阪大学二十五年誌』は一九五六(昭和三一)年に刊行された。編集後記によると、全般にわたる記述は本部および各学部の庶務が担当したとのことである。第一章総記第一節概観のうち「沿革」については、全一頁の簡単な記述であるが、それは以下の文章ではじまっている。

大阪大学は、昭和六年五月一日、大阪帝国大学として創立され

たときに始まるものである。しかしながら、本学が生まれるに至つた経緯を遡つて行けば、その学問的系譜は、実は徳川幕府中期に興つた大阪文化の輝かしい伝統につながるものといふことができるであろう。

そしてその後、懷徳堂、適塾について記述し、大阪大学との関係で以下のように論じている。

明治維新になって、新政府は、学問発達のため大阪に多くの教育施設を設けることになつたが、そのうちの一つに、医学所および文部省直轄病院があつた。これは、実質上緒方洪庵による適塾を継承して初められたもので、年々変遷発展して、大阪府立大阪医科大学および同附属病院となつて行つたが、やがて、後年本学医学部の母胎となつたことを想えば、適塾の学風は、まことに本学医学部の濫觴を培かつたものといふことができるであろう。

ここでは、適塾を医学部の濫觴と捉えている。しかし、懷徳堂については、第一章総記第三節図書館および第二章文学部では触れられていないが、第一章総記第一節概観では大阪大学との関係で論じられてはいない。

これと同じ歴史認識、すなわち適塾のみを大阪大学の濫觴とする意識は、総長の「序」にも見て取れる。正田建次郎総長(第六代)による「序」には「適塾以来の輝かしい伝統と若々しい熱意をもつて、苦難の多いこの二五年の発展の一路をたどりながら乗り越えてきました。」とあり、適塾を大阪大学の源流とみなしているが、懷徳堂についての記述はない。

今村荒男第五代総長は、「明治二年に文部省直轄の大阪病院が創立され診療の他に伝習と称して医学教育もおこなわれその後身が現在の阪大医学部と云い得るが、東大および京大が以前の帝国大学令の発布による、総合大学としての出発を起源とする例に従えば、大阪帝国大学の後身大阪大学の創立は二五年前と云い得る。」と記している。今村の総長在職時代には、財団法人懐徳堂記念会から懐徳堂文庫の寄贈を受け（一九四九年二月）、適塾記念会が創立（一九五二年二月）されたが、この文章では今村は大阪大学の起源を適塾、懐徳堂に求めていない。

ところが、木村英一（懐徳堂記念会理事、大阪大学名誉教授）「懐徳堂と大阪大学」²¹⁾には、今村総長と懐徳堂との関係について以下の記述がある（五一頁）。

当時の懐徳堂記念会理事長小倉正恒氏と、大阪大学学長今村荒男氏との間に、記念会の事業の存続と法文学部の建設とが相互に裨補し合う方法が考究せられ、けっきょく記念会の蔵書の寄贈を、大阪大学は懐徳堂文庫として受け容れると共に、向後の懐徳堂記念事業に対しては、大学の研究・教育事業のエキステンションの一部として協力することが約束された。（中略）

今村学長は、当時までに大阪大学の有に帰していた二大文化遺産、即ち史跡としての緒方洪庵の適塾の旧館と、旧懐徳堂の史料を含む懐徳堂文庫との、文教的意味について深く思いを致し、適塾を以って大阪大学の医学・理学的諸学部の源流とし、懐徳堂を以って文科系諸学部の源流として、二つを並べて適正規模において表

彰して行きたい、という意見を機会あるごとに開陳された。

また、梅溪昇「第五代総長 今村荒男」²²⁾には「荒男は、文科がよいとか、理科がよいとか言うのではなく、総長として常に大学のあり方を考え、『バランスのとれない大学はいかん』と言っていた。こうした立場から法文学部の実現には鋭意努力を傾注したもので、」との記述がみられる。

今村総長は、大阪大学に文科系学部を設置することに尽力した。そして彼の中には、適塾を阪大理系の源流、懐徳堂を阪大文系の源流とみなす認識はあったようである。しかし、『大阪大学二十五年誌』という大学の公式の沿革史においては、阪大の源流をあくまでその制度的なものに求め、懐徳堂・適塾に求めることは慎んでいたのであった。

C 大阪大学五十年史

大阪大学におけるこれまでで最も大規模かつ本格的な沿革史編纂は、五十年史編纂事業である。一九七九（昭和五四）年四月に大阪大学五十年史編集実行委員会が発足、同年七月には大阪大学五十年史資料・編集室が設置され、本格的な年史編纂活動を開始した。この五十年史では、『写真集 大阪大学の五十年』（一九八一年）、『大阪大学五十年史 部局史』（一九八三年）、『大阪大学五十年史 通史』（一九八五年）の三冊の書籍が刊行された。一九八〇年三月に決定された編集方針では、「(1)一九三一（昭和六）年創立以来五十年の歴史を記述し、大阪大学が人材の育成ならびに學術の発展に果たした役割を明らかにする」としつつも、「(2)大阪大学の創立事情に鑑み、前身校ならびに

研究所施設の沿革もとりあげ、大阪の文化的、社会的、経済的土壌との関連を重視する」ことがうたわれていた。

大阪大学五十年史編集実行委員会写真集小委員会編で一九八一年に刊行された『写真集 大阪大学の五十年』は、適塾からその記述がはじまり、「一八六九（明治二）年大阪府仮病院が大福寺に設立され治療と医学教育が実施された時、その主力をなしたのは適塾門弟たちであった。これは実質上緒方洪庵による適塾の医学を継承して始められたもので、後年の本学医学部の母胎となったことを思えば、適塾の学風は、本学医学部の濫觴を培ったものといえよう。」と記している。

これは『大阪大学五十年誌』の第一章総記をほぼそのまま引き写したものである。懐徳堂については、戦後の文科系学部創設の流れの中で触れられている。ちなみに山村雄一総長（第一一代）による「序」には「昭和六年にはじまる大学の歴史は、決して平々坦々としたものではない。懐徳堂に由来する」とあり、懐徳堂・適塾に触れるところはない。ところが、一九八三年に刊行された『大阪大学五十年史 部局史』の山村総長の「序文」には変化が見られる。

大阪大学は、一九三二年五月一日大阪帝国大学として創設され、一九八一年をもって創立五〇周年を迎えた。（中略）

大阪大学の建学の精神は、創設時の三学部にも明確に示されている。初代総長長岡半太郎は世界に知られた物理学者であった。理学部は、長岡総長の構想に基づいて学閥を廃して、全国から優秀が集められ、まったく清新な学部として創設された。

医学部と工学部とは、それぞれ数十年に及ぶ古い歴史と伝統と

を持つ大阪医科大学と大阪工業大学とを母体としている。その歴史は、大阪という地域と密接に結びつき、大阪という土地の上に、大阪の人とともに育てあげられてきた。その源流をたどると、大阪の文化と明治の科学の原点である江戸中期の漢学塾「懐徳堂」や江戸末期の蘭学塾「適塾」にまで遡る。

この文章で、山村総長が「大阪大学の建学の精神」について記していることは注目されるが、この点については後述する。ここでは、大阪大学の源流を懐徳堂・適塾に求めていることを確認しておこう。

ところが、『部局史』本文の記述では、各学部の源流を懐徳堂・適塾には求めていない。「第一章 文学部」では、懐徳堂文庫について記述されているが、自らの源流を直接懐徳堂には求めていない。また、『第六章 医学部および医学部附属病院』は、「本学医学部の起源を尋ねると、遠く明治初年の大阪仮病院に遡ることができる。」（二二〇頁）との記述からはじまっており、適塾については全く触れるところがない。

また、医学部では、一九七〇年に大阪大学医学伝習百年記念会『大阪大学医学伝習百年史年表』を、一九七八年には大阪大学医学伝習百年史刊行会『大阪大学医学伝習百年史』全三巻を刊行したが、これらの書籍でも大阪大学医学部の濫觴を「一八六九（明治二）年に設立された大阪仮病院と大阪医学校に求めている。」²³⁾

こうした大阪大学の歴史認識に大きな変化をもたらしたのは、一九八五年に刊行された『大阪大学五十年史 通史』であったと思われる。同書は、「第一章 明治維新と大阪の学問 第一節 近世大坂

の風土と学問的伝統」から記述を始めており、そこで懐徳堂・適塾について概観している。これは、「(2)大阪大学の創立事情に鑑み、前身校ならびに研究所施設の沿革もとりあげ、大阪の文化的、社会的、経済的土壌との関連を重視する」という編集方針をよく反映した構成である。ここでは、適塾を理科系の、懐徳堂を文科系の源流と区別して捉える見方はとっていない。懐徳堂・適塾を生んだ近世大坂の学問的伝統と風土が近代へ継承され、大阪大学へとつながっていったと理解しているのである。この近世以来の伝統の継承に力点を置く考え方は、一九九三年に刊行された大阪大学初の自己点検・評価報告書である『大阪大学白書・一九九三』にも継承されている。

しかし、山村総長による「序文」は、「大学の創設には当然のことながら、それを可能にした長い歴史的背景が存在する。本学のそれは主として近世における大阪のもつ文化的風土と学問的伝統であり、漢学における懐徳堂、蘭学における適塾という二つの塾堂がそれぞれ大阪大学の文科系と理科系の精神的原点となっている。」と適塾と理科系、懐徳堂と文科系を結びつけた理解を示している。

なお、『大阪大学五十年史 通史』第三編第三章「法文学部の創立」では、「このように、懐徳堂の光輝ある事業と貴重な蔵書を引き継いだことよって、本学の法文学部は、まさしくその嫡流となり、また懐徳堂は本学の文科系学部の源流と呼ばれるべきものとなった」(二五七頁)と、大阪大学と懐徳堂との関係について明記している。

5 OSAKA UNIVERSITY 60

創立六〇周年を記念して一九九一(平成三)年に刊行された『OSAKA UNIVERSITY 60』は「PAST(大阪大学創立六〇年の歩み)」と「NOW&FUTURE(大阪大学の現状と未来)」の二部構成をとっており、「PAST」は略年表と写真で構成されている。この沿革に関する写真集の部分は、『写真集 大阪大学の五十年』を簡略化したようなものであり、冒頭の「創立まで」は年表部分は懐徳堂・適塾について記載しているのに対し、掲載されている写真は適塾に関するもののみであり、懐徳堂の写真は『写真集 大阪大学の五十年』と同じく戦後の法文学部の設置の箇所に掲載されるという、中途半端なものとなっている。

この『OSAKA UNIVERSITY 60』の「序文」において熊谷信昭第一二代総長は、大阪大学と懐徳堂・適塾との関係について以下のように述べている。

我が国における六つ目の帝国大学として昭和六年(一九三一年)に創設された大阪大学は、平成三年(一九九一年)五月一日をもって創立六〇周年を迎えたが、その源流は古く、江戸時代における有名な学問所であった懐徳堂と適塾とに求められる。

(中略)

以上のような経緯から、我々は懐徳堂をもって本学の文科系諸学部の源流とみなし、適塾をもって本学の理科系諸学部の源流とみなしているのである。

ここでは、大阪大学全体の源流を懐徳堂・適塾に求めるという『大阪

大学五十年史『通史』の本文を継承しつつも、懷徳堂を文科系、適塾を理科系と区別する歴史認識がまだみられる。

e 大阪大学創立七〇周年記念写真集

創立七〇周年を記念して刊行された『大阪大学創立七〇周年記念写真集』は、『OSAKA UNIVERSITY 60』と同じく『PAST』と『NOW&FUTURE』の二部構成をとっているが、『PAST』は『OSAKA UNIVERSITY 60』をさらに簡略化し、大阪帝国大学の創設から記述を始めている。

同書の岸本忠三総長(第一四代)による「総長の言葉」には、「一九三一年に当時の大阪市民と大阪経済界の強い支援と財政的援助を得て大阪帝国大学として発足した本学には、江戸時代に大阪庶民の手によって設立され維持された懷徳堂や緒方洪庵の適塾にみられた自由闊達な知的探求の精神がおのずから強く受けつがれており、『地域に生き世界に伸びる』をモットーに、常に進取の気風を重んじて社会に貢献し、揺るぎない評価と地位を築いてまいりました。」とある。ここには、懷徳堂・適塾の精神を大阪大学が受けついでいることが表明されており、懷徳堂≡文科系、適塾≡理科系という区別は見られない。

f 現在

現在の大阪大学は、懷徳堂・適塾との関係をどのように捉えているのであろうか。大阪大学ウェブサイトの「大学の沿革」には、以下のよう²⁴⁾に記されている。

大阪大学は一九三一(昭和六)年、医学部と理学部の二学部で、わが国六番目の帝国大学として創設されました。しかし、阪大の学問的系譜は江戸時代までさかのぼります。一七二四(享保九)年に設立された懷徳堂は、特定の学派・学説にとらわれない自由な学風を誇りとする町人の教育機関で、独創的な学問と思想を開きました。また、一八三八(天保九)年に緒方洪庵が開いた適塾は大村益次郎、福沢諭吉、橋本左内など近代日本を切り開いた人物を輩出しました。阪大はこうした自由な学問的気風や先見性を精神的な柱として受け継いでいます。

ここでは、大阪大学全体が懷徳堂・適塾を受けついでような記述になっている。

入試用の大学案内である『PROSPECTUS OSAKA UNIVERSITY '07』には、「大阪大学は一九三一(昭和六)年に創設されましたが、その学問の精神的な源流は『懷徳堂』と『適塾』という江戸期の大阪に発祥した学問所、私塾にあります。」とある。そして「大阪大学文系学部の源流と位置づけられている『懷徳堂』、『適塾』の系譜は直接には大阪大学医学部へとつながっていますが」との厳密な系譜関係についての記述も見られるが、「未来を見通す先見性と学問への情熱という伝統は、大阪大学全学部の精神的源流となっています。」と、懷徳堂・適塾は大阪大学全体の源流として位置づけられているのである。

8 小括

ここまで、大阪大学が懷徳堂・適塾との関係をどのように捉えてきたかについて、時代的変遷に沿って確認してきた。

まず、大阪帝国大学創立時には、自らの大学の源流を近世の懷徳堂・適塾に求めるという意識は全く存在しなかった。その後、適塾と大阪府仮病院・医学校との人的な継続性から、適塾を医学部の、ひいては大阪帝国大学の濫觴とみなすようになる。戦後、懷徳堂文庫の寄贈を受けたことにより、文科系、特に文学部と懷徳堂とを結びつける歴史観が形成された。しかし、文科系の歴史が浅いこと、そして適塾と比べて懷徳堂との関係が蔵書の寄贈という希薄さによるものと推測されるが、懷徳堂を大阪大学の濫觴と見る見方はなかなか形成されない。その後、文科系＝懷徳堂、理科系＝適塾、と二分するとなえ方が出てくる。このとらえ方は、現在においても一部見受けられるが、現在では大阪大学全体を懷徳堂・適塾の系譜・精神をひくとするとなえ方が定着している。このようなとらえ方が形成される上では、『大阪大学五十年史 通史』の影響が大きかったと考えられる。このように自らの歴史を近世まで遡って求めようとする態度は、帝国大学としての歴史の浅さに起因するコンプレックスの裏返しかもしれない。また、大阪という土地の、東京や京都に対する対抗意識の裏返しかもしれない。

しかし、帝国大学でありながら大阪市民や財界の支援によって設置された大阪大学の成り立ちは、大坂町人たちによって設立された懷徳堂・適塾の設立やその自由な学風とリンクしている。現在の大阪大学

が懷徳堂・適塾を自らの精神的源流と位置づけていることは、大学のアイデンティティを確立しようとする意識の反映でもある。

なお、司馬遼太郎が小説『花神』で書いたような、緒方洪庵および懷徳堂の創始者たちを「校祖」とする意識は、大阪大学には存在しない。

4 「研究第一主義」

本節では、国立大学法人大阪大学の中期目標に書かれている「研究第一主義」の原点について確認することにする。中期目標において「研究第一主義」とカギ括弧付きで書かれていることを考えると、この言葉はいずれかの文献からの引用ではないかと予想される。

半沢朔一郎（『科学朝日』編集長）が長岡半太郎初代総長の最後の随筆集である『原子力時代の曙』に寄せた「年譜に代えて」には、「^{昭和}同九年、博士は辞職したが、『阪大を去るに当たっての辞』には、『阪大を日本一の大学にするため教授陣には私の力のかぎり新鋭をすぐって、集まって頂いたつもりだ。そして研究第一、殊に産業科学の研究に力を入れる気運を作った。長岡はいま阪大を去るが、どうか、教授、学生共々に、この阪大の学統を守って頂きたい。』といった切々な気持ちを吐露し、これが近來の名文とうたわれたのであった。」との記述が見られる。⁵⁵⁾

しかし、長岡が残した膨大な資料に基づいて客観的・学問的に記述された板倉聖宣・木村東作・八木江里『長岡半太郎伝』（朝日新聞社、一九七三年）には、「阪大を去るに当たっての辞」について触れること

なく、「研究第一」の文字も見あたらない。長岡は一九三四（昭和九）年六月二二日をもって大阪帝国大学総長を辞めた。その直前、六月一八日午後、阪大講堂で総長としての最後の演台に立ち、約九〇〇名の学生に向かつて一時間にわたり「懇談」を行った。そして六月二〇日には「三学部成立並理化学部落成祝賀式」が催され、長岡はここで「式辞」を述べている（前掲『長岡半太郎伝』）。この「懇談」、「式辞」はともに長岡半太郎『隨筆』（改造社、一九三六年）に掲載されているが、いずれにも「研究第一」の文字は見あたらない。総長長岡半太郎は成立式直後に退任したので、当日の式辞は公式の場における最後の発言であった。²⁶ 国立科学博物館には長岡半太郎関係資料が残されており、大阪大学文書館設置準備室では大阪大学五十年史編纂の際に複写したものを所蔵している。この大阪大学五十年史編纂資料を見ても、長岡が阪大総長を辞するに当たって「研究第一」と述べたことは確認できない。

しかし、長岡が教員に対して教育よりも研究を重視していたことは、各種講演等から読み取ることができる。

『私の理想として教へるよりも研究するといった心がけの優秀な人達（教授陣）を収容し、そこに特色をおきたい。』（一月一二日学士会で開かれた「帰朝祝賀会における報告」『大阪毎日』）とまず抱負を語った。²⁷

「大学の主体は教授である、教授其宜きを得ざれば、学生の成績を昂上し、大学の品位を高むる能はない。若し大学に特色ありとすれば、それは教授研究の特色である。特色なき平凡の教授は歓迎されない。

大学もまた平凡化するからである。試みに阪大理学部は特色あらしめんとすれば、それは運動員と予が先に問答した如く、理工の間に位置する鼠色の学科に重きを措くが、創立当時の精神に適合するを認めた。²⁸」

「教授は教授し且つ研究する、即ち "lehren und forschen" を以て職務と考えねばなりません。研究の顕著なる教授が居れば、大学の品位を高め、優良学生も集まります。」²⁹

このように長岡は教員（教授）に対してすぐれた研究を行うことを求めていたことは確かである。長岡が「研究第一」と述べたことを一次資料で確認することはできなかったが、長岡が研究を重視していた事実と、比較的容易に読むことのできる長岡半太郎『原子力時代の曙』に寄せた半沢朔一郎の「年譜に代えて」の記述とが相俟って、国立大学法人大阪大学の中期目標に「創学以来の『研究第一主義』をモットーとし」と記述されたのではなからうか。³¹

5 「地域に生き世界に伸びる」

現在、大阪大学の公式ウェブサイトの「大学の概要」をみると、まず「大阪大学は『地域に生き世界に伸びる』をモットーに教育・研究の諸課題に取り組んでいます。」と大きく書かれている。³² 「地域に生き世界に伸びる」は、広報誌『阪大NOW』の表紙にも毎号書かれている。また、大阪大学の全学の自己点検・評価報告書のタイトルにも「地域に生き世界に伸びる」は使われている。³³

このように、現在ではすっかり大阪大学のモットーとして定着している「地域に生き世界に伸びる」であるが、この言葉の初出は、大阪

大学事務局総務部評価・広報課調べによると一九八一（昭和五六）年一月に将来計画懇談会教育・研究体制専門委員会（和田博委員長）がまとめた中間答申「地域に生き世界に伸びる」教育・研究体制の将来計画（以下、「中間答申」）であるといわれている。³⁴

将来計画懇談会は一九八〇年七月一六日に発足し、大阪大学の将来計画について検討した。同懇談会の下には、教育・研究体制専門委員会、キャンパス拡張整備専門委員会、地域協力専門委員会の三つの専門委員会が置かれ、一九八三年七月に教育・研究体制専門委員会が出した答申「教育・研究体制の将来計画について」をもって、同年二月付で将来計画懇談会の答申とした。教育・研究体制専門委員会は、一九八〇年七月一六日の発足以来検討を重ねてきたが、討議に当たっては、本学教官の教育・研究体制についての意向を確かめることが先決と考え、教授、助教授、専任講師を対象としてアンケート調査を実施した。これに寄せられた回答一五六編をまとめて注釈を付けたものが中間答申である。³⁵

この中間答申では、「Ⅲ アンケートに見られる将来計画の方向」の「1. 大学の理念」の副題に「地域に生き世界に伸びる」の言葉がみられる。以下、本文中にはどのような文脈の中でこの言葉が登場するのか、確認しておこう。

寄せられた回答はいずれも、すばらしい着想にあふれている。委員会としては、それらを生かしてゆくよう努力しなければならぬ。しかし、大阪大学の将来を考えるに当たっては、なお検討すべき残された問題がいくつかある。

第一に、素材がどんなによくても、それを集めただけでは、絵にならない、いい絵を描くには全体を統一するモチーフがはっきりしていなければならない。大阪大学の将来像を描く際のモチーフは何か。それを定めるのが大仕事である。

回答者が大阪大学の将来に何を期待しているかを推察すると、一つには、国際的に活躍すること、そしてもう一つには、地域との関係を大切にすることであるように見受けられる。これを標語的に表現すると、「地域に生き世界に伸びる」ということになろうか。³⁶

ここにみられるように、「地域に生き世界に伸びる」は、一九八〇年頃の大阪大学教官たちが、将来の大阪大学像として期待しているところのものをまとめたものである。しかし、これはただ単に未来を夢想したものではない。教育・研究体制専門委員会は、自らの委員会が設置された背景として、大学紛争、大阪大学五〇周年をめぐる問題意識、キャンパス問題の三点を指摘している。そして実施されたアンケート調査は、このような問題に対する答えを探る作業の一つであった。「地域に生き世界に伸びる」は、大阪大学の歴史を踏まえた上での将来像だったのである。

このことは、一九八五年に刊行された『大阪大学五十年史 通史』の「序文」に山村雄一総長が寄せた文章によく現れている。

本学の歴史を一言に表現すれば「地域に生き世界に伸びる」ということになるであろう。関西の中核都市として、町民の独立独立の精神に支えられて成長してきた大阪という地域と深いかわ

りあいを持ち、その強力な支持を背景として本学は他の国立大学には見られない独自の発展を遂げてきた。本来学術と文化は国際的に評価されなければならない。本学はこれまでもそうであったように、将来にむかって国際化という言葉が不必要になるほど世界中に広くて深い国際交流を行うとともに、国際的に最も高く評価される大学に成長することが望まれる。

「地域に生き世界に伸びる」は、大阪大学固有の歴史に根ざした言葉であったからこそ、現在に至るまで大阪大学において広く使用されているのである。国立大学法人化を前に二〇〇三年三月に制定された「大阪大学憲章」においても、「かねて大阪の地に根づいていた懷徳堂・適塾以来の市民精神を受け継ぎつつ、『地域に生き世界に伸びる』ことをモットーとして」とある。なお、「大阪大学憲章」は法人化に際して、改めて基本理念を明示したものである。

6 初代総長の影響―第一代総長山村雄一にみる―

これまで、「懷徳堂・適塾」、「研究第一主義」、「地域に生き世界に伸びる」という現在の大阪大学が掲げている三つのキーワードがいかにして「発見」、「形成」されてきたかについて考察してきた。本節では、これらが具体的にどのような意味を持つのかについて、『大阪大学五十年史』刊行時の総長である第一代総長山村雄一の言葉を手かりに考察する。

『広島大学二十五周年史 通史』の場合と異なり、『大阪大学五十年史 通史』の本文には建学の精神について記述してはいない。しかし、

総長による「序文」には、大学の特徴や建学の精神といった事柄に論及しているものがある。以下にそれをみていこう。

一九八三（昭和五八）年に刊行された『大阪大学五十年史 部局史』の「序文」において山村雄一は以下のように述べている。

大阪大学は、一九三二年五月一日大阪帝国大学として創設され、一九八一年をもって創立五十周年を迎えた。

大阪大学の建学の精神は、創設時の三学部¹⁾に明確に示されている。初代総長長岡半太郎は世界に知られた物理学者であった。理学部は、長岡総長の構想に基づいて学閥を廃して、全国から俊秀が集められ、まったく清新な学部として創設された。

医学部と工学部とは、それぞれ数十年に及ぶ古い歴史と伝統を持つ大阪医科大学と大阪工業大学とを母体としている。その歴史は、大阪という地域と密接に結びつき、大阪という土地の上に、大阪の人とともに育てあげられてきた。その源流をたどると、大阪の文化と明治の科学の原点である江戸中期の漢学塾「懷徳堂」や江戸末期の蘭学塾「適塾」にまでさかのぼる。

このように山村は、初代総長長岡半太郎による学閥を廃した清新な人事と大阪という地域との密接な結びつきに、大阪大学の建学の精神を求めているのである。²⁾一九八五年に刊行された『大阪大学五十年史 通史』の「序文」では、「大学の創設には当然のことながら、それを可能にした長い歴史的背景が存在する、本学のそれは主として近世における大阪のもつ文化的風土と学問的伝統であり、漢学における懷徳堂、蘭学における適塾という二つの塾堂がそれぞれ大阪大学の文科系

と理科系の精神的原点となっている。」(中略)「本学の歴史を一言に表現すれば『地域に生き世界に伸びる』ということになるであろう。」(中略)「初代の長岡半太郎総長によって行われた理学部人事における選択、配慮と勇断こそ本学の伝統的精神として継承されるべきものである。」と、「懐徳堂・適塾」、「地域に生き世界に伸びる」というキーワードが登場し、初代総長長岡半太郎による人事を大学の「伝統的精神」として高く評価している。山村は、第五六回大阪大学卒業証書授与式総長式辞「遠まわりのすすめ」では「大阪大学の初代の総長で、本学の学祖と呼んでよい長岡半太郎先生」と述べ、創設時の理学部人事に触れている。³⁸⁾このような山村の大阪大学に対する歴史認識や長岡半太郎に対する高い評価は、大阪大学総長退官記念・日本学士院賞受賞記念講演「おもいでに学ぶ」³⁹⁾においても、繰り返し述べられている。この山村による大阪大学観の形成に当っては、長岡半太郎という斯界の著名な学者が初代総長でありすぐれた業績を残したことが影響しており、長岡を大阪大学の創設者と捉えることによって大阪大学を顕彰しようという意識が読み取れるのである。

おわりに

本稿を終えるにあたって、広島大学と大阪大学の双方に共通する点を指摘しておきたい。

まず第一には、広島大学は森戸辰男、大阪大学は長岡半太郎という斯界の著名人を初代学長・総長にいただいたという点である。そして、

森戸・長岡の両者は、いずれも特色ある大学運営を実践し、そしてそれがいわば「建学の精神」となっていることである。

第二に、「建学の精神」が形成されるに当たっては初代学長・総長の影響は大きかったが、唯単に彼らの個性に依拠するのではなく、大学の創設の経緯、特に地域社会との関係を反映していることである。

第三に、この「建学の精神」を「発見」するに当たっては、広島大学二十五年史編纂、大阪大学五十年史編纂といった、年史編纂室を設置して専従のスタッフを置いた本格的な年史編纂が大きな役割を果たしたことである。しばしば指摘されるように大学年史は、かつての記念式典の引き出物から学術研究の対象となった。しかし、長い時間と労力、お金をかけて作った年史を一体誰が読むのか、といった問いは、今なお発せられ続けている。本稿は広島大学と大阪大学という二つの国立大学について概観したに過ぎないが、年史の意義と効用の一つに、建学の精神の発見とそのことを通じてのアイデンティティの形成ということを付け加えることができるのではなからうか。国立大学が法人化し個性化が求められている現在、年史をはじめとして大学の歴史に学ぶ意義は、ますます大きくなっていると考えられる。そしてこのことは、時限的な年史編纂室だけでなく、恒久的に大学資料を収集・整理・保存・公開する大学アーカイブズが必要になってきていることを示している。

本稿では、広島大学と大阪大学の建学の精神について考察してきた。本稿で指摘したことは他の国立大学についても当てはまるのであろうか。地方国立大学にとっては、前身校創設時や新制大学発足時の

地域社会との関係が重視されるのではないかと予想されるが、その実態については、個別大学史を検証していかねばならない。他日を期したい。

注

- (1) 西山伸「大学沿革史の課題と展望」『日本教育史研究』二六、二〇〇七年。
- (2) 寺崎昌男『プロムナード東京大学史』東京大学出版会、一九九二年、
「Ⅲ 明治日本と東京大学」、初出一九八六年。
- (3) 広島大学五十年史編集委員会・広島大学文書館編『広島大学五十年史
通史編』広島大学、二〇〇七年。広島大学の歴史については、広島大
学二十五史編集委員会編『広島大学二十五史 通史』広島大学、
一九七九年、も参照。
- (4) 森戸辰男「変革期の大学―開学式にさいして―」森戸辰男『変革期の
大学』広島大学本部、一九五二年。
- (5) 森戸辰男の思想上におけるこの講演の位置づけについては、小池聖一
「森戸辰男の平和論」『広島平和科学』二八、二〇〇六年、参照。
- (6) 森戸辰男『変革期の大学』（前掲）。
- (7) 小宮山道夫「広島大学の創設過程と建学理念の形成に関する考察」中
国四国教育学会編『教育学研究紀要』第四八巻第一部、二〇〇二年。
- (8) 森戸辰男『広島大学再発足のころ』民主教育協会中国支部、一九七〇
年。
- (9) 原田康夫『広島大学を語る』広島大学五十年史編集室、二〇〇一年。

- (10) 原田康夫『広島大学を語る』（前掲）。
- (11) 大阪大学の歴史については、大阪大学五十年史編集実行委員会編『大
阪大学五十年史 通史』大阪大学、一九八五年、参照。
- (12) 西尾幾治編『大阪帝国大学創設史』恵済園、一九三五年、三一頁。
- (13) 学内初の附置研究所である微生物病研究所は、大阪の商人山口玄洞の
寄付金に基づき一九三四年に設置された。一九三九年に設置された産
業科学研究所は、産業界の積極的な働きかけによって設けられた。産
業科学研究所の設置については、鎌谷親善「大阪帝国大学の形成―理
学部と産業科学研究所―」『大阪大学史紀要』四、一九八七年、に詳し
い。
- (14) 司馬遼太郎全集第三〇巻、文藝春秋、一九七四年、初出一九六九年。
- (15) 本節の記述・引用は、梅溪昇・芝哲夫『よみがえる適塾―適塾記念会
五〇年のあゆみ―』大阪大学出版会、二〇〇二年、による。
- (16) 大阪大学適塾管理運営委員会規程第一条。
- (17) 本節の記述・引用は、梅溪昇『大阪学問史の周辺』思文閣出版、
一九九一年、による。
- (18) 『大阪帝国大学創立史』は、遺族（孫の福井康子ら）の手によって
一〇〇部復刻され、二〇〇四年には大阪大学出版会から復刻された。
- (19) 西尾幾治の経歴については、福井康子「復刻の忘れな草に その三
余波と漣」二〇〇五年、一九三―一九四頁、参照。
- (20) 『大阪大学二十五史』大阪大学、一九五六年、六―七頁。
- (21) 大阪大学編『懐徳堂の過去と現在』財団法人懐徳堂記念会、一九七九
年。

- (22) 大阪大学編『大阪大学歴代総長餘芳』大阪大学出版会、二〇〇四年。
- (23) 伴忠康(大阪大学医学伝習百年記念会会長・大阪大学医学部長)「序」大阪大学医学伝習百年記念会『大阪大学医学伝習百年史年表』には、「大阪大学医学伝習百年記念会は、明治二年に摂津国西成郡寺町いまの東区上本町四丁目大福寺に設立された大坂仮病院と大坂医学学校を大阪大学医学部の濫觴と定めました。」とある。
- (24) <http://www.osaka-u.ac.jp/about/history.html>。
- (25) 長岡半太郎『長岡半太郎 原子力時代の曙』人間の記録八三、日本図書センター、一九九九年、二一五頁、底本一九五一年。
- (26) 大阪大学五十年史編集委員会編『大阪大学五十年史 通史』(前掲)、一六六頁。
- (27) 板倉聖宣・木村東作・八木江里『長岡半太郎伝』(前掲)、五五〇頁。
- (28) 長岡半太郎「総長就業と廃業」長岡半太郎『随筆』(前掲)、四五二頁。
- (29) 長岡半太郎「三学部成立並理学部落成祝賀式式辞」長岡半太郎『随筆』(前掲)、四〇六、四〇七頁。
- (30) 長岡が「阪大を去るに当たつての辞」において「研究第一」と述べたとする半沢朔一郎「年譜に代えて」の記述は、梅溪昇「初代総長 長岡半太郎」大阪大学編『大阪大学歴代総長餘芳』(前掲)にも引用されている。
- (31) 東北大学も「研究第一主義」をモットーとしている。「研究第一主義」と新制東北大学』『東北大学史料館だより』六、二〇〇七年、参照。大阪帝国大学創立時には、初代理学部部長真島利行をはじめ、東北大学から移籍してきた教員も多い。
- (32) <http://www.osaka-u.ac.jp/about/outline.html>。
- (33) 大阪大学自己評価委員会編『大阪大学白書・一九九三』大阪大学、一九九三年、大阪大学自己評価委員会編『大阪大学・一九九六』大阪大学、一九九六年、大阪大学自己評価委員会編『大阪大学・一九九九』大阪大学、一九九九年。
- (34) 『阪大NOW』九六、大阪大学総務部評価・広報課、二〇〇七年。
- (35) 大阪大学将来計画懇談会「教育・研究体制の将来計画について(答申)」一九八三年。
- (36) 渡辺太郎委員(経済学部)執筆。
- (37) この序文で「建学の精神」としている事柄を、昭和五十六年度(創立五十周年)大阪大学入学宣誓式総長告示「伝統の継承」(山村雄一『医学と人間 山村雄一对談・講演・著述集』クリニックマガジン、一九八七年)では、「本学のもつ特徴」と表現していた。「特徴」が「建学の精神」に昇華したことが確認できる。
- (38) 山村雄一「医学と人間 山村雄一对談・講演・著述集」(前掲)、五四六頁。
- (39) 山村雄一「医学と人間 山村雄一对談・講演・著述集」(前掲)。
- (40) 西山伸は、「大学アーカイヴズ」の現状と今後」全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会、二〇〇五年、において、「国立大学の場合も法人化を受けて個性化を求められていることは変わらない。ただ、国立の場合には明確な『建学の理念』は存在しないことが多いため、創立から現在までの大学の歴史そのものや、地域社会との関係のあり方等に大学の個性を見出す方向性をより強く

もつことになる。」と指摘している。

筆者は、旧制大学がそのまま新制大学になった場合、旧制大学がその他の学校を包括して新制大学になった場合、旧制高校を包括して新制大学になった場合、師範学校が中心となって新制大学となった場合、といった新制大学の成立形態の相違によって、「建学の精神」を求めるところが異なってくるのではなからうかと想像している。

(かん まさき)

大阪大学文書館設置準備室講師、広島大学文書館客員研究員)